

NEWS **ポストセブン**

# ウクライナ危機 雅子さまに世界中が期待か、ロシア語堪能で“奇跡の外交力”

2022/03/10 07:15

 とてもいいね

1 コメント

 212

「私の果たすべき役割というのは（中略）皇室という新しい道で、自分を役立てることなのではないか」——かつて雅子さまは、会見でそう語られた。世界が未曾有の危機に陥ろうとしているいま、「中立」を貫く日本の皇室で、雅子さまだからこそできること。

【写真23枚】モスクワで薄水色のウエアでスキー板を履き笑顔の幼少期の雅子さま。他、エレガントな雅子さまや皇族のかたがた、NYでの小室さん眞子さんも

国民的人気のコメディ俳優が、テレビドラマで大統領役を演じたのち、本当に出馬して一国の大統領に——ウクライナのゼレンスキー大統領の経歴はドラマチックだ。



© NEWSポストセブン 提供 ゼレンスキー大統領とオレナ夫人と、笑顔で言葉を交わされた（2019年10月、東京・千代田区。内閣府提供）

2019年5月の就任から5か月後、彼の姿はウクライナから遠く離れた東京にあった。霞が関や永田町を巡り日本の政府首脳や議員、財界人に面会。ウクライナの国内改革を進めたい、東欧の平和・安定を実現させたいと熱く語り、日本からの経済援助を訴えた。また、折からの援助で下水処理場の改修が実現したことなどの感謝を伝えたという。

そしてその翌日の2019年10月22日、ゼレンスキー氏は皇居・宮殿に足を踏み入れた。天皇陛下の即位にまつわる儀式へ参加するためだ。タキシードに白い蝶ネクタイ姿で、微笑んではいるが緊張の色が見て取れる。隣には、ウクライナ国旗の色を思わせる薄いブルーのスリットドレスを身に纏ったオレナ夫人の姿があった。

職員に促され、天皇皇后両陛下に歩み寄ったゼレンスキー氏。差し出された陛下の右手をがっちりと握り、笑顔で祝意を伝える。陛下からのおことばに、ゼレンスキー氏が左手を振ってリアクションするシーンもあった。

その後、ゼレンスキー氏は雅子さまとも握手。雅子さまは、ゼレンスキー氏とオレナ夫人にまっすぐ視線を送られながら、柔和な笑顔でお言葉を返されていた。日本とウク

ライナの関係にとって重要な瞬間。そして、世界の平和を希求される両陛下にとってもまた、決して忘れられない時間だったはずだ。ゼレンスキー夫妻は家族とともに、京都を訪れるなどした後、日本を離れたという。それから約2年半。ウクライナには惨状が広がっている。

## 「完全に中立」という特別な力

ロシア軍によるウクライナ侵攻によって、被害は軍事施設に限らず、原発や、民間人が暮らす住宅やアパートメント、民間施設にまで広がった。近隣国へ避難した人は170万人を超えるという。ロシアが武力行使に打って出たのは2月24日。前日は、陛下の62才の誕生日だった。

「国と国との間では、さまざまな緊張関係がいまも存在しますが、人と人との交流が、国や地域の境界を越えて、お互いを認め合う、平和な世界につながってほしいと願っております」

誕生日に際しての会見で、陛下はそう明かされた。しかし、それを踏みにじるように、ロシア軍は国境を越えた。

「日本の皇室は、あらゆる国家間の紛争に中立の立場であり、一方を応援したり非難することはありません。ただ、陛下も雅子さまもテレビや新聞の報道でウクライナ情勢を

注視されているといえます。陛下の世界平和へのお気持ちは揺るぎなく、会見で発言された通りの思いを抱かれています」（宮内庁関係者）

そうした「中立」の姿勢こそ、世界に類い稀な、日本の皇室の特別な力と言えるだろう。垣間見えたシーンがある。即位の中心的儀式「即位礼正殿の儀」でのことだ。

世界中から出席した要人の中に、イスラエルのベンアリ駐日大使と、パレスチナ暫定自治政府のアッバス議長がいた。イスラエルとパレスチナは長らく緊張関係にあり、両者の代表が同席する機会は、和平交渉や国連総会など“政治の場”に限られる。

「日本の天皇の即位を祝う場に同席したことは、かなり特別なことです。終戦後、昭和天皇、上皇陛下も国同士の争いごとにかかわらず、世界平和に尽くされた。その姿勢があったから、各国は日本の皇室を尊敬の念を持って見えています。だからこそ、両国から要人を迎えることができた」（政府関係者）

## 「ロシア語で寝言をおっしゃった」

ロシア軍は、ゼレンスキー氏の暗殺を何度も試みたという。その恐怖と闘いながら、カメラの前でウクライナ国民を鼓舞し続けるゼレンスキー氏は、無精ひげが伸び、時折疲れた様子も見せていた。痛ましい姿に複雑な思いを抱かれていますのは、ほかならぬ雅子さまだろう。雅子さまは、幼少期をソ連時代のモスクワで過ごされた。父・小和田恆

さんがモスクワにある日本大使館の一等書記官に任命されたのは、雅子さまが1才8か月の頃だった。

「移り住んだアパートの前にあった広場で、すぐに現地の子供たちと遊び始めるほど、モスクワ暮らしに順応されたといえます。初めて覚えたロシア語は“話す”という意味の“ガバリッチ”。しばらくすると、ロシア語でのコミュニケーションは何不自由ないほどだったそうです」（皇室ジャーナリスト）

当時、「ロシア語で寝言をおっしゃった」という逸話まで残るほどだ。

「保育園では木から滑り落ちて擦り傷を作っても、泣き言を言わないお強いお子さまだったといえます」（前出・皇室ジャーナリスト）

旧体制下のモスクワは、決して物質的に豊かだったわけではない。また、冷戦時代のソ連はアメリカと激しく対立していた。アメリカと同盟を結ぶ日本は、言わば敵方だ。そんな環境のなかで幼い雅子さまは成長された。3年弱のモスクワ生活は、雅子さまに大きな影響を与えただろう。

一方、日本とウクライナの関係は、ウクライナが1991年に旧ソ連から独立し、翌1992年に外交関係を樹立したところから始まった。遡って、1965年には黒海に面する港湾都市オデッサと横浜市が、1971年には首都キエフと京都市が、姉妹都市関係を結んでいる。

独立後、ウクライナは民主化や経済活動の活性化を進めてきた。日本はこれまで経済支援のほか、下水処理施設の改修や空港の拡張、IT技術の輸出など、インフラ整備の面でも支援を行ってきた。たしかに、前述した「即位の礼」での両陛下とゼレンスキー夫妻との対面は、時間にしてわずかなものだった。

「わざわざ日本にまで足を運び、即位への祝意を伝えてくれたゼレンスキー氏のことを、両陛下は心に留められているに違いありません。その相手が、悲惨な戦禍に巻き込まれ、身命を賭して戦おうとしていることには、悲しみも覚えていらっしゃることでしょう。特に雅子さまは、両国に親しみをお持ちでしょうから一層おつらい気持ちを抱かれているのではないのでしょうか」（前出・宮内庁関係者）

## 米クリントン大統領と露エリツィン大統領

前述したように、日本の皇室は「中立」である。

「中立というと、“どっちつかず”という印象を抱きがちですが、こと皇室外交においては、どの国や地域ともお互いを尊重し、友好関係を築くことができるということです。これは日本の皇室にしかなしえないことです」（別の皇室ジャーナリスト）

戦後、日本政府のアメリカ追従の姿勢は拭えない。しかし、皇室はそうした政治的なスタンスとも切り離された存在だ。

「あらゆる国や地域とフラットな立場で交流できることが皇室の特殊性です。そうした皇室の国際交流の特徴を、外務省も重々理解している。日本の皇室は、世界各国をつなぐ『奇跡的な外交力』を持っていると言えるのです。

そのうえ、いまの皇室の中心は、幼少期を旧ソ連やアメリカ、スイスで過ごし、のちに米ハーバード大学を卒業されて外務省の最前線で外交に携わられた雅子さまです。陛下は“外交のエキスパート”である雅子さまから直接、最新の世界情勢についての情報を得て、国際交流に臨める。これほど心強いことはありません」（外務省関係者）

雅子さまの“外交力”は、これまでも発揮されてきた。雅子さまは英語はもちろん、前述したようにロシア語のほか、スペイン語、フランス語、ドイツ語も自在に操るといふ。約30年前の1993年7月、日本で東京サミットが開催された。

「アメリカからはクリントン大統領（当時）、ロシアからはエリツィン大統領（当時）が出席しました。迎賓館で開催された政府主催の晩餐会で、両者の間の席に座ったのが雅子さまでした。

通訳を介さず、クリントン大統領とは英語で、エリツィン大統領とはロシア語でやりとりをする雅子さまのお姿には政府関係者も驚きを禁じ得なかったといいます。冷戦終結直後、融和に向けて歩み寄る2人のリーダーの間にいらしたのは、ほかでもない雅子さまだったのです」（別の外務省関係者）

ウクライナ侵攻をきっかけに、「新冷戦」「第三次世界大戦」など、ふたたび東西の分断がささやかれている。アメリカとロシア、どちらの土地にも居住経験があり、どちらの言語でも円滑なコミュニケーションが可能な皇后の存在は、どれほど貴重だろうか。1994年にアラブ7か国を訪問された際には、女性だけの晩餐会に出席された。

「男女は同席しないというイスラムの慣習に則ったことでした。隣に皇太子さまがいらっしゃらない状態での晩餐会と言われたら、たいていの女性ならば戸惑ってしまうでしょう。しかし雅子さまはそうした場でも、持ち前の語学力とコミュニケーション力で会話を弾ませ、アラブ諸国の女性王族とのパイプを構築されたのです」（皇室記者）

記憶に新しいのは2019年5月、陛下の即位後初めての国賓として、アメリカのトランプ大統領（当時）が来日したときのこと。皇居・宮殿の玄関で、両陛下は通訳なしで夫妻を迎えた。

「当時、愛子さまは高校2年生。トランプ夫妻の子息は13才でしたから、雅子さまとメラニア夫人は互いのお子さまの話に花が咲いたようでした」（前出・皇室記者）

その後開かれた晩餐会のお見送りの際にも、雅子さまの外交力の高さが光った。

「雅子さまは夫人の手を握り、両頬を軽くふれあわせるチークキスを交わされました。チークキスはヨーロッパの挨拶の慣習で、通常アメリカの人はほとんどしません。ただ、メラニア夫人はスロベニア出身なので、親しい友人にはチークキスをする文化があ



る。雅子さまはそういったこともご存じだったのでしょう。雅子さまは、短時間で打ち解けられ、そのうえお相手の文化を自然に取り入れてコミュニケーションをとられたのです」（前出・外務省関係者）

そして今年5月、就任後初めてアメリカのバイデン大統領が来日する予定だ。

「トランプ氏のケースを考えると、バイデン夫妻も両陛下と面会する可能性は充分あります」（前出・宮内庁関係者）

その頃、ロシアのウクライナ侵攻はどんな局面を迎えているだろう。日本はもちろん、アメリカや諸外国は対ロシア政策を求められ、世界の勢力図は大きく書き換えられているかもしれない。「新冷戦」により、深い分断が起きていることもあるだろう。そんなときに、世界平和を築く旗振り役になるのは、“奇跡の外交力”を持たれる雅子さま、そして日本の皇室ではないか。

※女性セブン2022年3月24日号